

戦争の時代から平和の時代へ

宇野正三

20世紀は「戦争の世紀」と言われます。併し、これまでの歴史を見れば、人類は殆ど戦争に明け暮れていたと言えましょう。武器の発展に伴い、戦争の死者も飛躍的に増加し、第二次世界大戦では、数千万人が死亡しました。特に、この戦争で原子爆弾が開発、使用され、我が国の広島・長崎において酸鼻を極めた被害が生じました。その後、幸い核戦争は起こってはいませんが、未だ世界には数万発の核弾頭があり、核戦争の危険性は無くなっていません。武力紛争も世界の此処彼処で頻発しています。その他、飢餓、貧困、環境問題など、人類はその生存を脅かす様々な問題に直面しています。我々は、これらの負の遺産を一日も早く解決し、平和な21世紀を創らなければなりません。

それでは、「平和」とは一体何でしょうか。それは人間社会の理想的状態を意味しており、「幸福な社会」こそ理想の社会であると私は考えます。この「幸福」を、「各人の人生上の目的が実現される過程で生じる精神的喜び」と規定したいと思います。この夫々について、もっと詳しく考えて見ましょう。

人間が生まれてきた目的は何でしょうか。即ち、人間の存在の超越的意味に関する問いです。これは、特に青年期に逢着する疑問であり、多くの人は結局明確な答えを見出せないまま、その後の人生を過ごすことになります。私も例に漏れず、この問題に苦悩しました。多くの哲学書も渉猟しましたが、明確な解答は見出せませんでした。結局、私は、我々の人生に超越的意味はないことに気付きました。或は、もっと厳密に言えば、そのような意味はあるかも知れませんが、我々人間には分からないということです。これは虚無感を惹起しそうです。併し、超越的目的は無くても、我々は自分の人生において実現したいと思っている目的があります、或はそのような目的を立てることによって、それを持つことが出来ます。それは、例えば、政治家になって国を運営したいとか、世界を雄飛する実業家になりたいとかの諸目的です。この目的が実現していきますと、我々は喜びを感じます。目的は仕事上のものだけではありません。名画が見たいとか、名演奏を聴きたいとかの目的を持っていて、その望みが叶

えられたときにも、我々は喜びを覚えます。この精神的喜びが「幸福」です。幸福に満たされたとき、我々は生まれてきて良かったとの感懷を持ちます。これで人生は良いのではないのでしょうか。これ以上我々は人生に望む必要はありません。つまり、人間は幸せになれば、人生の意味を全うしているのだと思います。幸福は、人生の目的ではありませんが、幸福な人生において、人は充足感を持ち、人生を肯定するのですから、人生の本来の姿が実現されていると言えます。幸福でない人生は、人生の本来のあり方ではないのです。随って、不幸な人は「生まれて来ない方が良かった」との嘆きを抱きます。これは、不幸な人生が人生の本来のあり方でないことを何よりも良く表しています。人生上の目的が首尾良く実現されていきますと、自分はこの目的を実現するために生まれてきたのだと思うようになります。孔子は「五十にして天命を知る」と言いましたが、このような感慨を述べたものでしょう。超越的な存在者から与えられた使命があるかどうかは分かりませんが、我々が自分の仕事に、そのような深い意味付けをが与える場合があることは事実です。

このような幸福を一人でも多くの人が味わえる社会を作ることが、人類の歴史の目標になります。幸福な社会は、そこにおいて人々がそれ以上を望まないわけですから、究極目標と言えます。この目標を実現するためには、各人が人生上の目的を立てて、その実現に向かって努力していく中で、他人の幸福を破壊しないように努めなければなりません。故に、私は善なる生き方を、「他人の幸福を配慮しながら、自分の人生の目的を追求すること」と規定したいと思います。自分が目的実現に努力する過程において、自然にランクが付き、落伍していく人も出て来ますが、いわばその競争がフェアに行われている場合、その結果は仕方ありません。ただ、落伍者もある程度の生活が保障されるよう政治的社会的措置が必要です。

各人の幸福の実現には自ら目的を達成しなければなりませんから、その意味で幸福は与えられるものではなく、自分で勝ち取るべきものです。併し、各人の幸福を実現するためには、個々人の努力だけで不十分で、社会そのものがその実現に努めなければならない幸福の必要条件があります。即ち、それらの条件が無ければ、人は幸福になれないわけです。その必要条件とは、第一に生命の安全、第二に生活の快適さです。この夫々の条件について考えてみましょう。

生きていることは、幸福を享受しうる根本条件です。生命を奪うもの、生命に危険を及ぼすものは極力廃絶しなければなりません。戦争は、人と人との殺

し合いですから、断じて無くしなければなりません。戦争には大別して、侵略戦争と防衛戦争がありますが、否定すべきは侵略戦争です。防衛の口実の下にすべての戦争は起こされてきたから、防衛戦争まで否定すべきだという議論があります。勿論、一切の戦争が無いのに越したことはありません。併し、個人が危害から自分の生命を守るために防衛行動を取ることは、生命が幸福実現のための根本条件であるとする私の考えからは認められなければなりません。同様に、他国の攻撃によって自国の安全が危殆に瀕する恐れがある場合には、自衛戦争は正当と言わなければなりません。国連憲章において、国家間においての「武力による威嚇又は武力の行使」は禁止されていますが、他国から武力攻撃があった場合に自衛戦争は許されております。勿論、各国が軍備を持って対峙し合うよりも、お互いに軍備が無い方がより安全ですから、軍縮に努め、最終的には軍備撤廃を目指すべきです。さて、この侵略戦争の原因は何でしょうか。

名誉欲、物欲、征服欲等々、様々な欲望を叶えるため、或は主義主張を他国に及ぼすために武力を以て他国を攻撃することにより侵略戦争が起こります。その場合、他国の人々の幸福は配慮されていません。相手の国民への愛情があれば、戦争は仕掛けられないはずです。侵略戦争は、自国の都合によって、他国の人々をその生命も含めて犠牲にする行為です。戦争を根絶するためには、政治的制度の改善も大事ですが、何よりも、他国の人々の幸福にも配慮するという生き方を我々が身につける必要があるのです。少なくとも、それが政治的指導者には必要です。それは、カント哲学の言い方をすれば、実践理性に基づく生き方の実現です。カントは国際連合に平和の基礎を期待しました。併し、今日、国際連合は実現しましたが、未だ世界は平和な世界には程遠いのが現実です。恒久平和を目指す立場からは、人間の生き方を問題にせざるを得ません。

今日、民族や宗教の対立が原因となった紛争が多発しております。何故、民族や宗教が異なると紛争になるのでしょうか。我々はそれらの紛争の根本に、「差別」の存在を洞見しなければなりません。人間の偏狭な心が、民族や宗教が異なる個人や集団に対して、政治的社会的差別を生み出すのです。このために、信じるべきは同じ民族や同じ宗教を持つ者ということになります。人は民族や宗教に限らず、自分たちの仲間と異なった個人や集団に平等に対処することは困難であるのが一般的です。異集団同士が、社会のあらゆる面で平等に扱われるならば、紛争は生じないはずです。では、どうすれば、我々は異なった個人や

集団を平等に見ることができるのでしょうか。この問題を考えることは、戦争原因を無くする方策を考えることでもあります。

私は差別問題を解決するためには、人間や宗教の根本的同一性に目覚めなければならないと思います。基本的人権という思想があります。基本的人権とは、「人が人であるが故に有する基本的な権利」を意味しています。この権利概念は、人間の根本的平等性を前提としています。では、全ての人は何故根本において平等なのでしょう。基本的人権は当然のこととされていますが、その基礎付けは決して容易ではありません。むしろ、現実の様相を見ると各人みんな違って、不平等なのが実態ではないのでしょうか。ライプニッツの哲学に「不可識別者同一の原理」という理論がありますが、正に現実世界においては、個々の存在は全て、お互いに異なっているのです。千差万別の人間において根本的同一性が無ければ、平等の概念は成立せず、基本的人権も成り立ちません。併し、現象世界においては差別しかないわけですから、平等は本体界においてしかあり得ません。しかも、現象界と本体界の間に距離があつては、現象界においては平等ではないわけです。実は、現象界と本体界を截然と分けることは間違いです。本体界は現象世界が有限の時間的世界であるのに対して、無限、永遠の世界です。無限の世界はその概念からして、有限を含んでいます。無限と有限は相対立するものではなく、一体なのです。無限は一切の限定を超えていますから、無限定のものです。有限は、これに対して、一定の存在です。この有限の存在は、無限定者の限定された姿として、両者の関係は「有限は、無限の有限的現れ＝表れ」であるということです。この無限なるものは、宗教的には神とか仏とか呼ばれるものです。人は、根本において本体界と一体ですから、誰もが神或は仏の性質を持っているのです。この点において、万人は同一で、平等です。ここに、基本的人権概念が成り立ち得る根拠があります。

併し、現実の人々には、高邁な人もいれば、犯罪を犯すような人もいて、人格に違いがあります。この心の善し悪しは、どれだけ人の心が本体界に近づいているかによって決まります。人は本体界と一体であるといっても、自覚的にそうであるわけではありません。実際、多くの人はこの本体界に気付いていません。この根本的な無知を、特に仏教では「無明」と言っています。人の心の悪の原因は、究極的には、この無明にあるのです。故に、自らがそれと一体である本体界に気付いて、この無明を智慧に転じれば、誰でも人格高邁な存在になることが出来ます。人間の本性が善である所以は、このような構造にあるの

です。この、人々の根本的同一性に目覚めれば、人は根本的には差別をしなくなります。勿論、既に申しましたように、現実の人は人格も能力も各人異なっていますので、すべての面において同じに扱うことは出来ません。例えば、学力の違う生徒たちに同じ点数を付けるわけにはいきません。併し、根本的にはすべての人の人格を評価する立場が拓かれるわけですから、陰惨な差別はあり得ません。故に、民族が違う人々を虐待したり、他国の人々の幸福を破壊するような戦争を仕掛けることもあり得なくなります。

ここで、最近、我が国の賃金体系が能力給に移りつつあることについて一言したいと思います。職員の能力（それは職員の人物によって測られなければなりません。私は、業績は本人以外の事情で挙がらない場合もありますので、業績という結果からのみ能力を判断する成果給を正しいとは考えません。）に応じて、賃金に格差を付けるという賃金制度のありかたは、能力に関係の無い年齢や性別などによって賃金高が決まる不合理を無くすることによって、職員の仕事に対する満足度を高めます。併し、賃金にはそれによって自分や家族が生活するという生活給的性格があります。随って、賃金は個人や家族が生活できる額でなければならないわけで、決して能力だけで決められてはなりません。また、能力の違いによって賃金に大幅な格差が生じることは、却って多くの職員の不満を高めます。能力給は、それによって職員の満足度が高められるように運営されるべきものです。孔子も言うておりますように、「過ぎたるは猶お及ばざるが如し」です。

次に宗教の違いから来る対立について考えてみましょう。

世界には、様々な宗教があります。併し、絶対者である神仏は無限の存在ですから、数的に一つしか存在し得ません。また、さきに述べましたように、本体としての神仏と我々は一体であり、このことに気付くことを仏教では「悟り」と言っています。この気付きによって得られる神仏との一体感が宗教心或は宗教的境地です。この一体感に色々な種類があるはずもなく、すべての宗教はこの点において同一であり、一致します。この一体感以外の教義の多くは、言わば民族的衣装の違いのようなもので、宗教の本質をなすものではありません。故に、この本質に立脚すれば、教義の違いによって争いが生じるということはありません。宗教が異なれば争い合うというのは、まだその宗教的境地が至っていないからだと言わなければなりません。

こうして、人間存在の根本への認識を深め、神仏との一体性において人間を

捉える真の宗教的立場を確立することによって、我々は差別が生じる根本を断つことが出来ます。しかも、人間だけでなく、森羅万象が神仏の現れ＝表れですから、すべての存在が神仏と一体です。このような自然の見方をすれば、自然を単なる征服の対象として見たり、利用する立場からのみ関わるのではなく、人間と本質を同じくするものとして、共生すべき存在として対するようになります。このような思想的境位は環境問題を解決することにも繋がります。

これまでの人類の戦争の歴史は、根本的には、差別に起因し、更にその原因は、森羅万象と神仏との一体性に蒙昧な根本無知、即ち「無明」にあるのです。

今一つの平和の必要条件の「生活の快適さ」について考えてみましょう。不快なものは、音一つであっても、幸せを破壊します。空港の近くの人々が訴訟などを起こすのも、限度を超える不快からです。又、最近は学校での「いじめ」が深刻化しています。自殺する子どもが絶えないのも、辛さという不快のためです。この他、人権抑圧や、貧困、飢餓など、人間の生活を不快にする諸問題が山積しています。このように、人間に不快を与えるものには、物的なものも精神的なものもありますが、その解決方法の根本は、人間に不快を与えないとする愛情にあります。私は、善なる生き方を「他人の幸福を配慮しながら、自分の人生の目的を追求すること」と規定しましたが、不快は、この善行に外れた生き方から結果するわけです。個人や、組織、団体、国の利益が最優先し、社会や世界の幸福の実現という視点が失われると、お互いに傷付け合い、幸福を破壊し合うことになります。このような自己中心的生き方を克服するためには、自己の枠に縛られない広い精神的世界を確立しなければなりません。そのような世界は、さきに述べたように、神仏との一体感を確立することによって拓かれます。各人がこの体験を得るのが理想ですが、少なくとも、そのような世界や人間の見方が学問的真理として一般的にならなければなりません。併し、「仏教は無神論である」などという言辭もなされており、また、自然科学も無神論的であり、哲学界においても形而上学的言説を非とする立場もあり、無限、永遠の世界は学問の世界においても、未だその存在を明確には認められていません。

絶対者と相対者が一体で、後者は前者の現れ＝表れであるという説、又その一体感に基づく生き方が正しい境位であるという立場は、存在論に基づく価値論です。社会科学であれ、自然科学であれ、科学は世界の構造、実態を明らかにする人間の営みであり、私がこれまで述べてきたことはこの意味で科学的理

論です。随って、私の考えでは、神仏に基づかない理論は根本的に間違っているのです。そのような理論は存在の半分しか見ていないからです。「科学者も人間としては信仰を持っているが、科学者としては無神論である」などという言葉をよく聞きます。併し、神仏が一切の存在の根本であるとする私からすると、そのような科学者の生き方は不可解です。彼には、世界の構造についての誤認識があると思います。存在の根本は、科学的理論の根本でもなければなりません。

宗教の中には、神と人間を隔絶させて考える教義を持ったものがあります。それらの宗教では一般に神秘主義を嫌います。人間が神と一体になることは不遜であると考えられ、また、神秘主義者は神と一体になった場合、脱我状態や恍惚感に陥ります。このような神秘主義についての見方や神秘主義者が陥る精神状態は、いずれも神と人間との間に距離を置いて見ている所から生じるのです。元々、一体のものが一体になるのが不遜とはいかなることでしょうか。また、一体である真実に気付くことから脱我状態や恍惚感は生じません。禅語にも、「平常心、是れ道」とあります。異常な心理状態になるのは、神の捉え方や神と人間と関係について間違った見方をしているからです。神仏は無限の存在として、一切を包んでおり、我々の根源はそのまま神仏の世界なのです。勿論、神仏と世界には違いもあります。森羅万象は有限な存在として一定の存在です。これに対して、神仏は無限の存在として無限定の存在です。併し、両者は不連続の連続の関係にあります。特に、両者の一体性に注目しなければなりません。

私はこれまで神仏の存在を当然のこととして述べてきましたが、その根拠は何かとの問いが出されると思います。所謂、神の存在証明の問題です。私は、この証明は時間の存在から入っていけば可能であると考えます。時間は継起性を本質的特徴としています。存在は一瞬一瞬変化しており、時間的に前の存在と後の存在は異なっていますが、両者が連続していなければ継起性は成立しません。この連続性は、継起する各局面だけでは成り立ち得ません。各局面はそれぞれ独立しているからです。この独立している時間の各局面を連続的に結び付けるものは何でしょうか。この存在は時間とは異なりながら、しかも各時間を連続的に結合できる存在でなければなりません。この存在は、各時間と一体の存在で、それ自身は時間でない存在、即ち無限、永遠の存在です。これが神仏です。時間的な全ての存在は、この絶対者を媒介として継起的連続性を可能ならしめているのです。この無限定者の各局面として限定者が成り立ち、無限

定者は各局面を通して一貫していますから、局面同士の連続性が成り立つのです。このことをさきには、無限の現れ＝表れとして有限が存在すると述べました。この継起性が、我々のような精神を持った存在において、過去、現在、未来の３次元の時間性として成立するのです。我々の心が時間を生むわけではなく、客観的な継起的時間があるからこそ、３次元の心理的時間も可能になるのです。

このようなわけで、仏教は決して無神論ではありません。永遠の存在に当たるものは、仏教では法身仏と申します。阿弥陀如来も、インドの言語の意味からすれば、無限の命（無量寿）、無限の光（無量光）を指しており、無限、永遠の存在のことです。今日、仏教の本質が無常論であるかのように説かれているのは由々しき事態と言わなければなりません。我々は自己の存在をいつも支えている神仏に目覚めなければなりません。カントは否定しましたが、人間に叡智的直観は可能なのです。平和を創るために、信頼醸成措置の促進や欧州連合（E U）のような制度的施策は有効ですし、推奨すべきです。併し、恒久平和を求める立場からは、制度面の改善のみならず、人間の心の覚醒を課題とせざるを得ません。神仏は決して遠くにはいませず、我々はいつも神仏と一体です。この真実に気付くことこそ、恒久平和実現への道を拓くものと確信いたします。

（平成１２年１０月８日攔筆）